

DAPCON Newsletter

救世観音デジタル調査会

あらゆる形状の3Dデータ化サービス

B・MUSEUM SaaS

海上博物館

デジタルアーカイブ
推進コンソーシアム
Newsletter
産業賞特別号

2022年9月14日、「2022 デジタルアーカイブ産業賞 受賞テーマ発表会」をオンラインで開催した。デジタルアーカイブ推進コンソーシアムでは、デジタルアーカイブ産業賞を2019年から開催し、今年で4回目を迎える。

発表会の冒頭に、緒方 靖弘事務局長が開会宣言を行った後、選考委員の吉見 俊哉 教授（東京大学 大学院／デジタルアーカイブ学会会長）、塩原 誠志 参事官（内閣府知的財産戦略推進事務局）からは、受賞者への祝辞と今後のコンソーシアムと産業会におけるデジタルアーカイブの発展への期待についてのお言葉をいただいた。

■吉見教授ご挨拶

私たちは今、新しさをただひたすら追求していく社会から、文化や知識なども含めた過去の資産を生かしていく社会への転換を経験しているが、デジタルアーカイブ学会とデジタルアーカイブ推進コンソーシアムは、このようなパラダイムチェンジを推進する車の両輪のような存在であると考えている。社会をより豊かにしていくためには、すでにある知識資産をどのように活用していくのが重要である。そして、デジタルアーカイブは、もっと様々な活用の仕方を検討しようとする大きな動きの中心を担っている。今回受賞した取り組みの内容も実に多様で、それは、様々な社会の場面で、草の根的にこのような動きが起きているということでもある。デジタルアーカイブ産業賞の取り組みもそのひとつであるが、コンソーシアムや学会の役割は、それを全体として見える化して、大きな力に変えていくことではないかと思っている。横の連携、連帯の輪をコンソーシアムや学会をベースに広げていってほしい。

■塩原様ご挨拶

デジタルアーカイブは社会が持つ歴史的、文化的な資源等の記録を未来に伝えるとともに、イノベーションの源泉とも言うべきデータやコンテンツの共有基盤となるものでもあり、様々な分野での利活用が期待される。デジタルアーカイブ社会の実現は、知的資産の交流・融合を通じて新たな価値創造の活性化を目指す我が国の知的財産戦略においても、重要課題のひとつである。こういった観点からも、政府全体でデジタルアーカイブの構築、利活用を推進していくよう、各省横断的な取り組みを進めている。コロナ禍では、さまざまなデジタルアーカイブ資源の潜在的需要が顕在化して、デジタルアーカイブの役割が改めて広く認識されたと感じている。政府としては、デジタルアーカイブの構築、共有と利活

用の基盤となるジャパンサーチの正式版を2020年8月に公開して以降も、さらに2025年に向けた戦略の検討を行い、これを進めていくという段階である。デジタルアーカイブの拡充とその利活用の促進にあたっては、産学官の連携が重要であるが、今回、産業賞の審査員にお呼びいただき、産業界等での様々な取り組みについても、改めて心強く感じた。今後もさらに皆様との連携の下で、デジタルアーカイブジャパンの推進を図ってまいりたい。

本年は、ビジネス賞2件、技術賞2件、貢献賞3件、奨励賞2件の計9件を選出した。発表会当日は、その中からご都合がついた、国見 太郎 様（日本放送協会 メディア総局メディア開発企画センター チーフプロデューサー）、原 洋介 様（有限会社原製作所 代表取締役社長）、鷹野 凌 様（特定非営利活動法人HON.jp 理事長／HON.jp News Blog 編集長）、内田 剛史 様（早稲田システム開発株式会社 代表取締役）、小林 巖生 様（インフォ・ラウンジ株式会社 取締役・副社長）、森 健人 様（一般社団法人路上博物館 館長・代表理事）よりそれぞれ受賞内容についてご発表いただき、発表者同士での質疑なども行われた。

受賞者の発表の後には、産業賞の選考委員でもある、高野 明彦 名誉教授・特任教授（国立情報学研究所）から、講評をいただいた。高野 名誉教授・特任教授からは、各賞の選考理由に加えて、DAPCONから見える視野の中だけでもこれだけ多様な事例が揃っていることに触れ、国全体としてもアーカイブに関する取り組みが多く行われてきていることに対する実感、様々なバックグラウンドの人が毎年加わっているコミュニティとしてのDAPCONの成長、受賞の方々の今後への期待を込めたお話をいただいた。



■1.「デジタルアーカイブ産業賞」趣旨

デジタルアーカイブ産業振興に寄与した活動を称揚することによって、デジタルアーカイブ産業及びデジタルアーカイブ推進コンソーシアムへの社会的関心を高めるとともに、産業の発展に資する。各年度で選考し、発表・授賞式を行う。

■2. 各賞の名称と概要

「デジタルアーカイブ産業賞」(4つの部門を設ける)

技術賞：前年度に発表または実施したデジタルアーカイブ産業に資する革新的な技術・手法・サービス・機材・システムを対象とする。

ビジネス賞：過去5年以内を対象としてデジタルアーカイブ産業の新しい分野・ビジネスモデルを開拓し、普及・活用等に優れた貢献をした個人・企業・機関・団体を対象とする。

貢献賞：期間を問わず、デジタルアーカイブ産業の発展に大きく寄与した個人・企業・団体を対象とする。

奨励賞：今後更なる発展が期待されるデジタルアーカイブ産業の個人・企業・団体を対象とする。

■3. 選考方法

DAPCON内に選考委員会を設置する。選考委員長はDAPCON会長とする。

作業部会員と、選考委員を選出する。作業部会員は、DAPCON幹事社から各1名が就任する。

作業部会員は、選考対象に関する情報の収集・調査を行い、各部門について、1件以上3件以下で賞の候補を推薦する。

選考委員は、その候補の中から、協議の上、各賞を決定し、選

考委員長の承認を経て発表する。

作業部会員及び選考委員には、DAPCON会員以外の就任も可能とする。

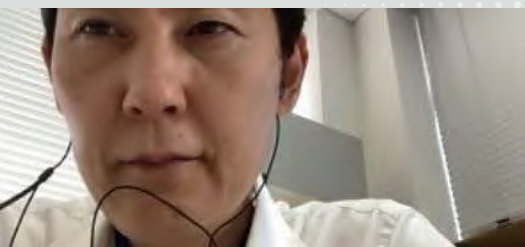
■選考委員・作業部会員

〈選考委員〉(50音順)

青柳 正規	デジタルアーカイブ推進コンソーシアム会長：選考委員長
塩原 誠志	内閣府知的財産戦略推進事務局参事官
高野 明彦	国立情報学研究所名誉教授・特任教授
寺田 航平	寺田倉庫社長／経済同友会幹事
吉見 俊哉	デジタルアーカイブ学会会長 (東京大学大学院情報学環教授)

〈作業部会員〉(50音順)

植山 秀治	凸版印刷株式会社
岡本 真	アカデミック・リソース・ガイド株式会社
神崎 正英	ゼノン・リミテッド・パートナーズ代表
小林 慎太郎	株式会社野村総合研究所
長谷部 旭陽	株式会社NTTデータ
宮本 聖二	立教大学特任教授・ヤフー株式会社
室田 秀樹	大日本印刷株式会社
脇 昌弘	ネットアップ合同会社

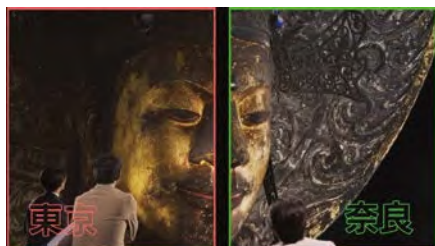


参加者集合写真

DAPCON産業賞2022 受賞テーマ発表会報告

技術賞

日本放送協会



この度は栄誉ある賞を頂戴し心より感謝申し上げます。この調査会は2020年からNHKが東京国立博物館と共同で進めている「8K文化財プロジェクト」の一環として開催しました。

これまでNHKでは文化財を（当然ながら）テレビカメラで記録して来ましたが、このプロジェクトでは、その記録の方法を根本的に変えることに挑戦しています。文化財をフォトグラメトリなどの技術を使って超高精細な3DCGモデルにし、さらにゲームコントローラーで360度、至近距離からでも観賞できるようにすることで新しい番組や展示を作っています。

法隆寺にまつられる国宝、救世観音像は、聖徳太子の等身像とされ、奇跡的な保存状態を誇りますが、秘仏として封印されてきたため、多くの謎に包まれています。このデジタル調査会は、実物の調査が難しい救世観音像を、超高精細な3DCGモデル

にして、研究者にデジタル上で調査を行ってもらおうというものです。コロナ禍でも、多くの研究者に参加して頂けるように、東西2会場の8KモニターでCGを同期させて動かせるようにしました。実物の救世観音像を取り囲んで調査するような感覚をデジタル上で作り出せたと感じています。

従来のテレビカメラを使う方法だと、撮影後に視点を変える事はできませんが、デジタルデータとして記録すると、「視点」をユーザーにお渡しし、誰もが見たい場所を見られることに無限の可能性を感じました。放送素材から（いい意味で）視点を消滅させることができ、メディアの新たな役割も生まれるのではないかと感じています。

技術賞

富士通株式会社

今回受賞の対象となりましたFUJITSU Hybrid IT Service FJcloud-Oは、多くの業界のお客様に幅広くご利用いただいておりますパブリッククラウドサービスです。弊社ではクラウド、オンプレミス、それらを組み合わせたハイブリッドクラウドと幅広くソリューションを展開しておりますが、その中でもデータアーカイブ領域に関しては、クラウドとオンプレミスをまたがるデータ階層化ソリューションを高く評価いただいております。

具体的にはパブリッククラウド上のオブジェクトストレージとオンプレミスのファイルストレージを組み合わせたデータ基盤を構築し、両環境の間でデータを自動的に階層化することで、コストと性能の最適化を実現します。例えば、アクセス頻度の高いデータは、I/O レスpons性能の高いオンプレミスのファイルストレージに配置し、アクセス頻度の低いデータは、データ量が増えなくてもコストを抑制できるクラウドに配置することでクラウドとオンプレミスの良いとこ取りのデータ基盤を実現します。

こうしたデータ階層化ソリューションをお客様の操作性を損なわずに、これまで通りの使い方でご利用いただける点もご好評をいただいております理由の1つです。弊社ではこうしたシンプルなデータマネジメントの実現を今後もハイブリッドクラウドの領域での重要テーマと位置付けており、今回の受賞を励みに、サービスのますますの拡充に取り組んでいきたいと考えております。

貢献賞

有限会社原製作所

「あらゆる形状の3Dデータ化サービス」の原製作所は工業製品をはじめ、生産設備、文化財、建造物、発掘現場から生物まであらゆる形状を独自の3Dスキャン技術でデータ化しアーカイブ事業やバーチャルツイン素材提供を行っています。

色と詳細形状と寸法が担保された3Dスキャンデータには不変の価値が産まれます。弊社はこれまで人類が築いてきた歴史や文化を「形」を通して後世に残します。

弊社は工業製品や金型、自動車業界のお客様を中心に製品検査や金型の精度確

認の3Dスキャン業務を行っており精度の高い3Dスキャンを行っております。この製造現場で培った測定技術を生かして文化財の木目や土器の縄目まで忠実に3Dデータ化をしています。

色彩もデータとして取り込み、フルカラー3Dプリンターによるレプリカ製作等も対応



しております。

3Dスキャンでお困りの事がございましたらお気軽にお問合せ下さい。



DAPCON産業賞2022 受賞テーマ発表会報告

貢献賞

特定非営利活動法人
HON.jp

株式会社hon.jpが運営していた「hon.jp DayWatch」は、2017年10月に当時の代表・塩崎泰三氏が急逝したことにより、2018年3



HON.jp News Blog (<https://hon.jp/news/>)

月に終了予定でした。しかし私たちは、2004年から続くデジタル出版関連メディアが消えてしまうのは社会的にも文化的にも大きな損失であると考え、ご遺族と相談、事業継承しました。

2018年10月1日には「HON.jp News Blog」としてリニューアル。2019年4月には法人名もHON.jpに変更しました。デジタル出版だけでなく紙も含めた、広い意味での本(HON)のつくり手をエンパワーメントすることを目的とし、国内外のさまざまな事例を紹介し、意見を交換し、仮説を立て、新たな出版へ踏み出す力を与える非営利メディアとして活動しています。メイン

テーマは「新時代の書き手」支援です。

HON.jp News Blogがデジタルアーカイブ関連の動向をカバーしているのは、新時代の書き手が知の再生産活動をするうえで、過去の英知や記録が必要不可欠だからです。過去の英知や記録が、デジタルネットワークを通じ距離や時間の制約なく利用できること。AI-OCRなどの技術革新により、中身を検索して掘り出すことが容易になったこと。そして、そのような環境が持続的に提供され、新時代の書き手に活用されることが、デジタルアーカイブ産業の振興に繋がるのではないかと考えています。

貢献賞

早稲田システム開発
株式会社

I.B.MUSEUM SaaSは、2011年11月にサービスを開始したクラウド型の収蔵品管理システムです。日本全国のあらゆる種類のミュージアムと関連施設・組織などに導入実績を有し、現在は460館※を数える規模にまで成長しています。

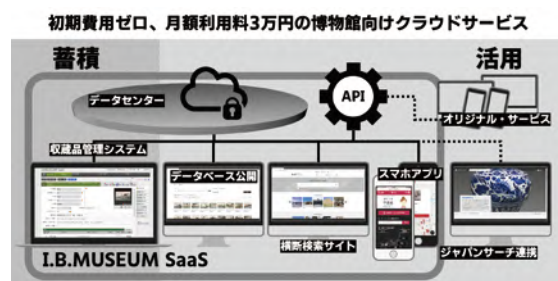
搭載された多数の機能は、この10年余で数え切れないほどの改善・追加を繰り返してきました。目録情報や人物データなどを効率的に管理する資料データベース機能に留まらず、受入・収集から展示・移動・貸出・修復などの履歴情報、さらには展覧会企画や展示ガイドに至るまで、館内の

学芸業務全体をカバーするサポート機能を網羅。もちろん、画像や3Dデータ、PDFファイルなど、多様なフォーマットの一元管理にも対応します。

また、システム上に登録されたデータは、個別に公開の可否を切り替えるだけで、そのままインターネット上の公開原稿として活用可能。独自に検索ページを開設することもでき、デザインテイストやレイアウト、公開したい項目などを自由にアレンジすることで、別途制作費用をかけることなく自館らしいデジタルアーカイブのWebページを作成できます。さらに、すでに全国150館で採用

されている展示ガイドアプリ『ポケット学芸員』をはじめ、テーマごとに選べるスマートフォン向けアプリも用意されています。

高精細画像など一部を除きデータ容量に制限はなく、従量課金もなし。初期費用ゼロ、3万円の月額利用料のみですべての機能をご利用いただけます。 ※2022年9月現在



奨励賞

一般社団法人路上博物館



当法人は「博物館はもっと面白い」をモットーに、博物館の面白さを人々に伝える取り組みと、未来における今よりもっと面白い博物館を作る取り組みを行っています。

博物館資料の3Dデータ化とその活用までを一貫して行っている点が我々のユニークな特長です。法人名の「路上博物館」は館長の森健人が「博物館資料は万人に開かれて然るべき」と考え、資料の3Dデータ化、及び3Dプリントレプリカの路上での展示活動を始めたことに由来します。

現状の博物館は「展示」が主たる資料公開の手段であり、人々は与えられた展示を受動的に観覧することしかできません。しかし資料の面白さは、ガラス越しに見るだけではなく、触り、嗅ぎ、五感を駆使することで得られるものです。例えば「彫像制作のためにブタに関する資料が見たい」と思えば、博物館へ行き、様々な品種のブタ

の頭骨を心の赴くままに観察することのできる、さながら図書館のような博物館こそ我々の目指す理想の博物館です。

その実現には第一に閲覧者たる市井の人々の標本・資料への興味関心を高めていくことが重要です。そして個々の資料の存在を知らせ、観察する楽しさを伝える方法の一つとして、我々は資料の3Dモデルデジタルアーカイブの公開、および路上での展示活動に力を注いでおります。誰もが如何なる社会的属性にもとらわれず、自らの意思で資料にアクセスすることができる未来を目指し、日々活動しております。

デジタルアーカイブ学会 産業とデータ・コンテンツ部会 DAショートトーク／産業のシーズをみつけよう！

柴野京子 上智大学 文学部教授／デジタルアーカイブ学会産業とデータ・コンテンツ部会 副部会長

1. 産業とデータ・コンテンツ部会について

デジタルアーカイブ学会は、発足時から産業との連携を視野に活動を行ってきましたが、より一層の取り組みに向けて、2021年度より「産業とデータ・コンテンツ部会」を設置しました（部会長：黒橋禎夫・京都大学教授）。部会名としてはやや長めですが、産業分野とデジタルアーカイブとの関わりは、コンテンツの生産、管理、流通、さらにはBtoBの産業シーズとしての利活用、および技術やノウハウの開発、マッチングなど幅広く、さまざまな分野とアイデアを共有できる場をめざしています。

2. キックオフ連続フォーラムの実施

初年度にあたる2021年度は、今後の具体的な取り組み課題を明らかにすることを目的に、3回の連続フォーラムを開催しました。第1回「デジタルアーカイブ産業のスコープ」では、野村総合研究所の茅屋早百合氏、TRC-ADEACの太田亮子氏、NTTデータの長谷部旭陽氏に発表をお願いし、続く第2回では「商業アートコンテンツ展開のための基盤と見取り図」と題して、集英社の岡本正史氏によるComics Digital Archivesの事例紹介、太下義之氏（同志社大学教授）によるアートコンテンツ活用の問題点を報告いただきました。

さらに第3回は「デジタルアーカイブを基盤とする産業振興政策：海外の動向とジャパンサーチの可能性」とし、生貝直人（一橋大学准教授）からはEUの政策動向、神崎正英氏（ゼノン・リミテッド・パートナーズ代表）からはジャパンサーチと産業との連携可能性について話をうかがっています。

3. DAショートトーク／産業のシーズを見つけよう！

この3回のフォーラムを経て、2022年度からスタートしたのが「DAショートトーク／産業のシーズを見つけよう！」です。前述のとおり、部会が扱うべき課題は多様であり、ニーズもそれぞれ異なります。特定の事例や目的からケーススタディを行い、モデル化をめざすという方向性もなくはないのですが、学会の役割として、まずはたくさんの課題に関する具体的な報告や議論を集め、情報共有と相互理解を深めることが重要ではないかと考えました。

ショートトークという名のとおり、これは1人あたり10～15分で、毎回6名程度の発表を、月1回ペースで行うものです。ZOOMを使つてのライブ配信ですが、動画は順次YouTubeに公開していきますので、オープンアーカイブとして、いつでもど

なたでもご覧いただけます。本稿執筆の時点では第2回までのものが、デジタルアーカイブ学会のウェブサイト上のリンク（<http://digitalarchivejapan.org/bukai/sangyo/shorttalk/>）から辿れるようになっていますが、今後はハッシュタグなどを用いてカテゴリー化したり、YouTubeチャンネル内にプレイリストを作って一覧できるようにしたりするほか、発表資料（PDFファイル）の提供も予定しています。

1年後には計72本の動画が揃う計算になりますが、このような形で〈産業のシーズ〉を貯めながら、デジタルアーカイブ振興における産学連携の見取り図を描いていきたい、というのがDAショートトークの目論見です。



DAショートトーク／産業のシーズを見つけよう！ 第1回～第3回	
知識はわれらを豊かにする 文化産業のデジタル化からみたDA論 映像コンテンツのDAによるエコシステムの取組み 文化財VR・デジタルアーカイブの取り組みについて マンガの機械翻訳と言語教育への活用 コンテンツ産業としての弊社の未来戦略と、それを実現するための取り組み DAの23問題 地域資料のデジタルアーカイブと教育利用 機械学習による線画変換技術 バブルック・ヒストリーとデジタルアーカイブ 出版、デジタル、アーカイブ メディア芸術ナショナルセンター法案（MANGAナショナルセンター整備運営法） 自発的学びを育むデジタル読書環境 大規模デジタルアーカイブ基盤 近代書籍対応OCRの開発 オープンデータ利活用のためのデータ検索エンジン デジタル世界の可能性を拡大～データを“繋ぐ”ブロックチェーン技術 脚本アーカイブから	黒橋禎夫（京都大学） 後藤和子（筑波大学） 緒方靖弘（寺田倉庫） 植山秀治（凸版印刷） 石渡祥之佑（Mantra） 能登健太郎（能登印刷） 柳と志夫（東京大学） 太田亮子（TRC-ADEAC） Edgar Simo-Serra（早稲田大学） 菊池信彦（国文学研究資料館） 柴野京子（上智大学） 小山絰一（大田政務官/井蓮士） 高野明彦（国立情報学研究所） 荒木純隆（長野県） 神田武（モルフォAIソリューション） 加藤誠（筑波大学） 関屋元義（富士通） 石橋映里（日本脚本アーカイブズ）

（敬称・肩書一部略）

4. 参加交流、宣伝の機会として

ライブ配信では質疑も可能です。すでにリピーターの方もいらっしゃると思いますが、企業のご参加も多いので、開催日時は固定せず、3か月ごとに曜日と時間帯を変えて行う予定です。また参加した方からも、発表したいというお声が複数寄せられていて嬉しい限りなのですが、発表や推薦、こういう話をききたい、というご要望など大歓迎です。事業や技術の概要紹介でも、論点の提示でも構いません。学会発表やシンポジウムに比べて気軽にご参加いただけますので、ぜひ情報交換の場、産業シーズ発見の場としてご利用ください。

〈産業とデータ・コンテンツ部会 お問い合わせフォーム〉
<http://digitalarchivejapan.org/bukai/sangyo/inquiry>
デジタルアーカイブ学会の部会案内にもリンクがあります。